

ご門主交代



五日十八時より非公開で行われたご譲渡式の様子。「御鍵」(親鸞聖人お厨子の鍵)「御印」(宗務に使用するご門主の公印)などが譲渡された。

西教寺報

118号
 仏歴2558(2014・平成26)年
 7月13日発行
 呉市中央7-7-13
 西教寺蔵本通支坊
 TEL 0823 (21) 2798
 FAX 0823 (21) 2795
 www.saikyoji.net
 郵便振替番号
 01340-3-29117
 宗教法人西教寺

去る六月五日と六

日、浄土真宗本願寺派
 ご門主交代にともなう
 一連の法要にお参りし
 てきました。

五日は、二十四代釈即如(大谷光真・68)門主が退任されるご消息発布式でした(二頁に「退任に際しての消息」参照)。また、翌六日は釈専如(大谷光淳・36)新門が二十五代門主となる法統継承式でした。「法統継承」とは「法義の伝統を継承する意。雨模様でしたが八千名が参詣しました。今回は本山より一ヶ寺一名との指示で新任職(智寧)が代表でお参りしましたが、しばらくすると皆さんともにお迎えする伝灯奉告法要があるそうです。その時は、ぜひいっしょにお参りいたしましょう。

註①ご消息(しょうそく)＝さまざまなか縁に際し歴代の宗主がその心を広く伝えるため出された書簡。

法統継承に際しての消息

本日、私は先代門主の意に従い、法統を継承し、本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主に就任いたしました。

ここに先代門主の長きにわたるご教導に深く感謝しますとともに、法統を継承した責任の重さを感じ、能う限りの努力をいたす決意であります。

釈尊の説き明かされた阿弥陀如来のご本願の救いは、七高僧の教えを承けた宗祖親鸞聖人によって、浄土真宗という法義として明らかにされ、その後、歴代の宗主方を中心として、多くの方々に支えられ、現代まで伝えられてきました。その流れを受け継いで今ここに法統を継承し、未来に向けてご法義が伝えられていきますよう、力を尽くしたいと思います。

宗門の過去をふりかえりますと、あるいは時代の常識に疑問を抱かなかったことによる対応、あるいは宗門を存続させるための苦渋の選択としての対応など、ご法義に順って(次頁へ)

(二頁続き) いないと思える対応もなされてきました。このような過去に学び、時代の常識を無批判に受け入れることがないよう、また苦渋くじゆの選択が必要になる社会が再び到来しないよう、注意深く見極めていく必要があります。



宗門の現況を考えます時、各寺院にご縁ある方々への伝道はもちろんのこと、寺院にご縁のない方々に対して、いかにほたらきかけていくのかを考えることも重要です。本願念仏のご法義は、時代や社会が変化しても変わることはありませんが、ご法義の伝え方は、その変化につれて変わっていかねばならないでしょう。現代という時代において、どのようにしてご法義を伝えていくのか、宗門の英知を結集する必要があります。

また、現代のさまざまな問題にどのように取り組むのか、とりわけ、東日本大震災をはじめとする多くの被災地の復興をどのように支援していくのかなど、問題は山積しています。

「自信教人信」のお言葉をいただき、現代の苦悩とともに背負い、御同朋おんどうぽうの社会をめざして皆さまと歩んでまいりたいと思います。

二〇一四年 六月六日
平成二十六年

龍谷門主 釋專如

退任に際しての消息

本日、平成二十六年六月五日をもって、私は本願寺住職ならびに浄土真宗本願寺派門主を退任し、後を本願寺しほう嗣法・新門しんもんに託すことにいたしました。

昭和五十二年四月一日、法統を継承して以来、三十七年二か月になります。至らぬことが多々あった中、今日まで務めることができたのは、仏祖のご加護は申すまでもなく、宗門内外の方々のご支援、ご理解とご協力のおかげであります。皆様に、心より感謝申し上げます。

この間、本願寺では、阿弥陀堂の修復、顕如上人けんによ四百回忌、蓮如上人れんによ五百回忌、御影堂の修復、宗祖聖人七百五十回大遠忌等のご縁を皆さまとともにすることができました。さらに、北境内地を取得できたお蔭で、活動をより広く展開できるようになりました。また、宗門では基幹運動の推進とともに、皆さまの活動や事業がありました。世界各地にも、お念仏の輪が広がっています。それらを巡教などによって身近に知り、御同朋おんどうぽうの思いを確かめることができましたこと、まことに有り難く思います。

この三十七年間は勝如前門主の戦争を挟んだ激変の五十年に比べれば、やや穏やかとも言える時代でしたが、国内では大小の天災・人災が相次ぎ、経済格差、気候変動、核物質の拡散など、深刻なあるいは人類生存にかかわる課題が露わになりました。その中で、心残りは、浄土真宗に生きる私たちが十分に力を発揮できたとは言えないことです。(次頁へ)



(前頁の続き) 私たちの宗門は、門信徒一人ひとりにみ教えが受け継がれるという素晴らしい伝統をもっています。これからも、社会の変動の中にあつて、浄土真宗のみ教えや伝統にある多様な可能性を見つけ出し、各人、各世代、それぞれの個性と条件を活かし、特に若い世代の感性和実行力を尊重して、一人でも多くの方を朋とし、御同朋の社会をめざして歩むことができるよう願っております。

後を継ぎます新門主は、築地本願寺で五年九ヶ月の間、副住職を務めて経験を積み見聞を広めています。今後は、法統を護るとともに、宗門全体を思い、広く宗教界を視野に入れて、務めることとなります。皆様のご支援をお願いいたします。

なお、私は、七十歳まであと一年余りとなりました。先のことは予測できませんが、阿弥陀如来の揺るぎない本願力の中に、宗祖聖人のみ教えを仰ぎ、浄土真宗の僧侶としての務めを、できる限り果たしたいと思っています。

二〇一四年
平成二十六年 六月五日

龍谷門主 釋即如

2013 年 白道会大会

いのちの根源

—中村薫先生（同朋大学）—

去る八月二十四日と二十五日、蔵本通支坊で白道会大会が開かれました。今年は中村薫先生（同朋大学元学長・現同大学教授・大学院教授・文学博士）におこしいいただき、二日間にわたり「いのちの根源」をテーマにお話いただきました。以下は公開講演会「まず有縁を度すべし」の要約。

名古屋の同朋大学からまいりました中村薫と申します。「宮市養蓮寺の住職もしております。今回お話したいことは「まず有縁を度すべし」ということと、『歎異抄』第五条に出てまいります。「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。」親孝行のために念仏申したことはない、とんでもないようなことをおっしゃった。いったいどういうことか。その最後のところに「まず有縁を度すべし」とあります。今日はこのことを、私の出あった事柄を通して聞いていただきたいと思ひます。

今日申し上げることは二点ほどあるんですけれども、その一つは、二〇〇四年の七月、大変暑い日でした。私の一番

上の娘が二十九歳で自ら生命を断つてしまいました。結婚して子どももいましたが、家に帰ってきていました。なぜ自ら生命を断ってしまったのか、ひとつには躁鬱という病に苦しんでいました。両極性の躁鬱、躁と鬱が交互に出てきます。たとえば躁になると二晩三晩寝なくても大丈夫。次は激しい鬱。暗い部屋で黙って沈み込んでしまう。怠けてるんじゃないのって言われるけどどうもじゃない、身体が動かなくなる、こういう病気でございます。その中に色んな症状が出てきます。パニック症候群といって、恐怖におののき、いてもたってもいられなく不安が襲ってくる、あるいは分裂してしまふ、言っていることとやっていることが何かが分からなくなつてしまふ等々の病氣、日本には現在三百万人いらっしゃるお聞きしています。どうしてそうなるのか、脳の病です。状況によって起きてきます。

私の娘は躁鬱で薬を飲んでいたので、五月に薬を飲むのをやめてしまったんです。もう自分の力で頑張ろうと。こういう行動に出て反動が来ちゃったんです。苦しくて苦しくて、ある薬一

袋全部飲んでしまったんです。救急車で運ばれて胃を洗ってもらったんですけど、飲んでしまったことにショックを受けて、それでまた気が重くなってしまうって、最後に自ら命を絶ってしまいました。

みなさんの中で身近な方でお医者さんにかかっておられる人がおありでしたら、決して薬は自分でやめないように。薬だけがいいとは言いません。しかし薬を飲まなければ治らないこともあります。ですからカウンセリングと薬と両方を上手く兼ね備えていくことが大事であって、自己判断で薬をやめてしまうと反動がやっつきまして、自殺願望欲という状況に陥ります。毎年自死される方の半数近くが鬱病で亡くなっているんです。

有愛非有愛

鬱病はお医者さんにかからなければなりません、われわれの心でひとつ考えてみます。有愛・非有愛という言葉があります。愛は

ラブというよりも渴愛、執着すること。有愛は死にたくないという欲、思いの中にあるのは「死にたくない」、いつまでも娑婆に未練があるのが我々の思いじゃないでしょうか。死にたくないという生命に対する執着です。

もうひとつは非有愛という、生きていたくないという欲なんです。死んでしまいたい、そういう欲が多くなると人間だけは自死をしていく、私の娘は躁鬱の病で、夢を見ているように瞬間的にずっと自ら命を絶つていきました。死ぬことよりもつらい何かがあったんだでしょうね。後から手帳



等々見てみますと、「私は幸せだ、しかし何か虚しい、恵まれているけれども虚しい」こう出てまいります。人間はいかなる苦しみや悲しみにもしたたかに堪えていける、みなさんもそうでしょう、それぞれがそれぞれ言うに言われない苦勞をされてきているはずなんです。

そこはかなりしたたかに生きていけるといえます、お金がなくても苦しくても生きていける。

しかし人間は虚しさには堪えられない、その虚しさのひとつが孤独なんです。独りぼっち。この寂

しさ辛さなんです。人間が最後にやはり寂しくて悲しくて生きておられないその一点は、独りぼっちということ。誰もよりそって

くれる人がいない、誰もいない、誰とも話することができない。私の娘の場合、何か寂しかった苦しかったことがあるでしょうけ

ど、脳のドーパミンという分泌液が狂ってしまった、パニックを起こしてしまったんでしょね。愛する夫と娘を置いて、自ら命を絶つてしまった。私は人生においてこれほどびつくりしたことはありません。なぜ、どうして、それはいろいろ考えてみれば、躁鬱の人の一番大変なのは自殺願望欲という、そういう欲が出てきてしまつので、ちゃんと見ていなければいけないけれど、ちゃんと救うことができなかった現実なんです。お寺の子でありながら、お父さんが大学の先生して仏教の教え

説いているそんな家庭でどうして自死が起きるのか、いろいろ言われますけど、現実には自ら命を絶つていきました。

泣いて泣いて

私は、びつくりしすぎて泣くどころではない、どうしてたか記憶にないんですけど、たった二つだけ、高史明という、山口県出身の在日

コリアンの作家です。息子さんが十二歳で亡くなって、その苦悩の中から親鸞聖人の教えに出あわれた方です。よくNHKテレビにも出ておられます。高先生のところ

に気がついたら電話してなんです。何をしゃべったか覚えてないんですけど、とにかく娘が亡くなった。先生はびつくりされました。「えーつて。その時にひとつだけ脳裏にこびりついているのは、「泣いて泣いて泣いて、お嬢さんの分まで生きて下さい。」こう高先生がおっしゃった。「泣いて泣いて泣いて、お嬢さんの分まで生きて下さい。」それから通夜から葬儀にかけて、とにかく泣いて泣いて泣いて。涙

が枯れないなと思いました。長男はその娘が亡くなる前に、たまたま「おねえちゃん、そんな薬を飲み過ぎたとか、いつまでも甘えてたらだめだ、しっかりしなきゃあだめだ。」と言ったことにごく自分を責めてしまい、一年間ほど失語症、言葉が出なくなりました。

つれあいは外へ出るのがイヤになりました。スーパーで会って「お気の毒様」と言われてもどうしようもない、何の言葉をかけられても受け入れられない。

私も二ヶ月ほど全ての仕事をやめて家にいました。娘の書いた日記を全部パソコンに打ち直した、そんな作業をしていました。持病が悪化し、体調を崩しました。

嘆きは消えぬ消えずともよし

住職が暗い顔をしているので、ご門徒が歌人伊藤左千夫の歌を紹介してくれました。

み仏に 救はれありと思ひ得ば
嘆きは消えぬ 消えずともよし
七枝ちゃんという、伊藤左千夫の一歳半の娘さんが溺れて亡くなった。医者に連れて行つたけれども間に合わなかった。びつくりして悲しんで悲しんで、一歳半ですから、仏さまの教えも聞いていない、仏さまの国へいったらどうか、不安になったんです。大丈夫だと思

つたならば嘆きは消えるだろうか、そんな簡単に消えるものではない、いや消えずともよし、一生涯私はそのことを背負うていこうというのが「嘆きは消えぬ消えずともよし」、実の事実を引き受けていくんです。ああでもないこうでもない、言い訳をするんじゃない、悲しいけれども事実を引き受けていく。

同悲同苦

そんな中で、話は飛びますけど、ひとつ教えられたことがあります。私の父がその年の十二月に亡くなりました。私の娘が七月に亡くなりましたので挨拶に行きました。そしたら「なんでだ、どうしてだ、なあ」というだけでした。父は悲しみが分からないのかな、認知症気味なのかな、それから二度行きましたが娘の話は出ませんでした。

父が亡くなり、遺体を整えている時に、兄が私たち夫婦に言った



いるんです。だから私の父親は娘を亡くした悲しみが分かるはずなんです、分かるからこそ軽々しく言えないことに悩んでいた、「同悲同苦」、悲しみ苦しみを共にするということ、多くの人が私といつしよに涙して下さっていたことを教えられました。

人生に春夏秋冬

そこで最後に申し上げることは、司馬遼太郎の「人生に春夏秋冬がある」という言葉。柳田邦男という方の息子さんが亡くなった。息子（洋一郎）さんが亡くなったことを本に書いて送つたら、司馬遼太郎さんが言葉を送つて下さった。

御胸中の万分の一を察し入りつつ、人間のいのちが両親や他の人々にいたわられつつ辛うじて存在していること、いたわりが千万倍ふえようと、掌の中の露の玉のように指の間から落ちてゆくこと、そのはかなさ、それは、内村鑑三

のことばを強いてあげれば「勇ましく高尚」なものであるかと存じます。吉田松陰は洋一郎さんより、二三歳上でもって生涯を終えました。「人は、たとえ六十、七十であろうと、二十五、六であろうと、春夏秋冬というのがあるのだ。悔ゆることはない」と死の直前に書きました。われわれは馬齢であります。二十五歳は宝石であります。まことにまことに。

これを私の友達が送ってくれました。これを読んで私はつくづく思いました。娘の二十五年の生涯というものの中に春夏秋冬がある。ただ私が娘に執着すれば、「もつともつと生きてほしかった」が私の心なんです。じゃあ娘の二十九歳の生命はそれで無駄かというと、二十九歳の中に春夏秋冬があったんだ、むしろわれわれのいのちほど馬齢（世に認められるような仕事もせず、いたずらに年だけ取っているという謙遜した表現）である、ただただ年をとってきたというよりも二十六歳の洋一郎君のい

のちも十分ですよ、私の娘は娘で二十九年のいのちを精一杯生きてくれた。それから九年経ちますけど、まだ娘のことは忘れられませんが、ふつと娘のことが思われてきます。でもこの頃、娘が先にお浄土に参っている、そのお浄土へ私も必ず参る、そして今、娑婆^{しゃば}の縁がある間、私はここで生かさせていただく、そんな時にね、娘と声なき声の対話をやつとできるようになりました。

「お父さん今こういうことで悩んでいるんだけどどう思う？」—そんなこと心配いらないよ、大丈夫だよ—と言ってくると、ああそうかと。これ自問自答です、勝手に言っているんですけど、遠くへ行つてしまった娘が隣にいてくれるような、そういう今、出あいをあらためてさせていただいております。

(休憩)

後半は、ハンセン病の叔父さんとの出会いを通してのお話でした。

人間解放とは、閉じこめた人と閉じこめられた人が出あつて



いくこと。「まず有縁を度すべし」ということは、私が救われることが最初。まずわが身が確かなものに救われていくということ。私が救われることによって隣の人が救われる。一人の解脱ではなく相互の解放が浄土。私をよそに置いておいて、皆救われますよつていうのは観念。俺さえ救われればよいということではなくて、そこにとどまつていられない。同悲同苦の世界に生きていくということ、と中村先生はお話下さいました。

夏休み合同子ども会

去る八月七日、蔵本通支坊で夏休み合同子ども会が行われました。

今年も龍谷大学伝道部からようちゃん（藤本さん）とえーちゃん（安部さん）が来てくれました。大会委員長は、ドラえも



んもどきのアヤシイ人でした。

四班に分かれて色々なゲームで得点を競いました。お行儀点、応援点なども加算される



4班は銀さん賞。仲間を信じてがんばりました。



お土産はシュロの葉っぱで作ったハエたたき。

ので、みんな見たこともない良い子でした（笑）。
昼食後は食べ放題かき氷大会。そして人形劇を見て表彰式。ご門徒提供のお土産をもらって帰りました。



さる吉くんとレオンちゃんの人形劇。



全種類かけてます。



べーっ。

元総代長水口満夫さんご往生



水口満夫さん

去る九月十一日、西教寺元総代長の水口満夫さんがご往生されました。退職後すぐから八十歳までの長い間、長ノ木本坊法座の帳場を務められ、長ノ木本坊総代、その後宮田信夫さんの後任として西教寺総代長に就任、長ノ木本坊本堂修復委員長として、バブル後の未曾有の大不況と芸予大地震の逆風の中、本坊の本堂を粘り強く見事に修復してくださいました。穏和で誠実、お念仏を深く喜んでおられました。長く惣付地区のお世話人をされた貞子さんとともに、ご夫婦で毎月法座にお参りになられ、一番前でお聴聞されました。身を粉にしてご法義繁盛のためご報酬くださいました。心よりお礼申し上げます。法名釋慶念（院号Ⅱ成満院）、行年九十五歳。

自死に向き合う

安芸南組（近隣六十ヶ寺）連続

研修会は、去る十月十二日、「自死に向き合う広島僧侶の会」代表の石田博文先生を迎え、公開講演会を開催しました。先生は、「あなたと共に」と題し、自身も自死遺族である立場から、経験を交えながら自死への向き合い方についてお話。先生が代表の同会では、奇数月の第二木曜日十五時〜十七時まで、本願寺広島別院（広島市中区寺町）で「いのちの集い（自死遺族の分かちあいの集い）」が行われています。（お問い合わせ・広島別院 082-231-0302）



石田博文先生（写真右）

原発問題の今とこれから

―念仏をいただく母として―

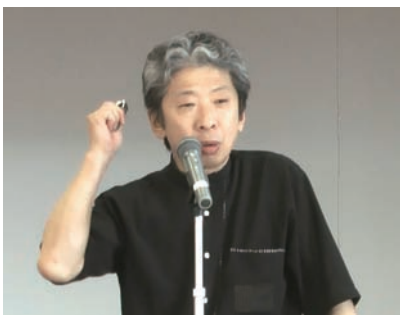


石橋寿美（釋純誓）先生

福島原発は、いまだに水をかけるだけでコントロールできない現状。被害・避難者の今、広がる汚染状況。私たちはどうなるのか、どうすべきなのか。去る十月十六日、環境市民の会会員で門徒推進員の石橋純誓先生にお話をいただきました。聞く、と、近くの伊方原発で事故が起こると、呉市は四ミリシーベルトの放射線量（防護服を着けていても長時間とどまらない量）となるそうです。純誓さんは、呉市が市民の安全を守ってくれるよう四国伊方原発と安全協定を結ぶ署名活動もされています。ご協力いただける方はお寺か石橋純誓さん（TEL 七四一・九二三）まで。

九条を守る音楽と講演

―小森陽一先生―



小森陽一先生

去る十月十三日、九条の会呉地区連絡センター主催で、小森陽一先生（東大大学院教授・全国「九条の会事務局長」）のお話を聞きました。この連絡センターは、呉の芸術家、マスコミ、教員など、さまざまな九条の会が集まり、二〇〇六年に前任職（岩崎正衛）や信楽峻磨（元龍谷大学学長・安楽寺前住職）先生らを発起人として発足、以後毎年音楽と講演の集いを開催しています。現在は、浄土真宗本願寺派安芸教区（五百ヶ寺）安芸門徒九条の会呉支部として参加しています。もう私たち日本人は誰も殺しません。殺されません。

報恩講つとまる

真宗門徒が最も大切にしてきた報恩講、十月

一日からご門徒各戸を回る「通り報恩講」にはじまり、最後の行事のくらもとどおりほう蔵本通支坊「ご正當報恩講法座」が終わるまでの五ヶ月間、二〇二三年度も大事につとまりました。

通り報恩講

お寺の近くは、日と順番をコース表でお知らせして六名でお参りしています（通称「コース」）。ご都合が合わない場合や、お寺から遠いご門徒は、相談の上、別の日時にお参りしています（通称「別修」）。昨今、旧市内は高齢化と過疎化で「コース」のご門徒が急速に減少、近い将来「通り報恩講」ができなくなるのではと心配ですが、ありがたいことに、「別修」として、仕事を差し繰り、遠方から戻ってまで大切にご縁あわれる方も多く、形は変わりながらも伝統

が伝わってゆきそうに喜んでいきます。



皆さんでご縁にあつて下さると、とても嬉しい。写真は末廣さん家の報恩講。

お取り越し報恩講法座

三津田支坊は、東京から本多静芳先生をお招きし、「あなたも、報恩講をお迎えしよう」というテーマでお話いただきました。ご満座参詣者には、婦人会による心のこもったお齋

のお接待がありました。



三津田支坊のお齋

蔵本通支坊は、先日『妙好人めぐりの旅』を出版された大阪の伊藤智誠先生をお招きし、「法薬に出



伊藤智誠著『妙好人めぐりの旅』法蔵館

会った人々」と題してお話いただきました。

また婦人会による出店もありました。普段手に入らない昆布や美味しい団子などが人気です。



売店のみなさん。暗くてすみません。

お齋のうどんやいなり寿司も、お精進とは思えないと評判です。忙しくて今年お参りできなかった皆さんも、ぜひ次の報恩講には、



お寺でお齋をいただく、もれなくかしの木クッキーがもらえます。

（年に一度を目標に）お参り下さい。



蔵本通支坊スタッフの皆さん（写っていない方もたくさんいます）。

報恩講はお仏壇のお掃除（おみかき）をします。こちらの仏壇は真鍮製のおりんなど、ピカピカ





小田製お
田さん特
出された
中に江さ
法原倅
精進ケ

ながのきほんぼう
長ノ木本坊は、『私のものさし』を出版された奈良の西光義秀先生にお越しいただきました。



西光義秀著『私のものさし 仏のこころ』探究社

先生は、「年に一度はお聴聞という人がいるが、報恩講は七夕か！」と喝破され、私はハツとさせられました。その通りでした。年に一度聞いたぐらいで間に合う私だったでしょうか。蓮如さんも「仏法には世間のひまを削ぎ去るべき。世間の隙をあけて法を置くべきやうに思ふこと、

あさましきことなり。仏法には明日といふことはあるまじきよしの仰せに候ふ。」
『蓮如上人御一代記聞書』
『註釈版』二二八〇頁と、隙なんてできるはずはない。明日はないぞと、私のために本当のことを厳しくお示下さっていたのです。



普段はお斎の準備でさみしくなる本堂ですが、ご門徒の皆さんが、お疲れの中懸命にお聴聞され、

また県内外からも熱心なお同行がたくさん参詣されて、本堂は熱気に包まれました。特に「たとえ天地がひっくりかえっても」のお話の時には、堂内がお



今年はスタッフの集合写真を撮れませんでしたが、写真は、会終了後お斎（とき）を食べて談笑する皆さん。

念仏の渦となりました。



いらっしゃいませ。本坊売店の皆さん。

安芸南組報恩講
仏の子の集い



今年は、元プロフットサル・ステラミ・ゴ岩手花巻の選手、山本戸大道先生の「夢の教室」でした。プロのトレーニングを応用した遊びで、子ども約八〇名は境内を走り回りました。その後、ひとり一人の夢を聞き、「ボクの場合、上手く行かなかったことも多かったけど、頑張ったら夢がかないました。みんなも頑張つて」と勇気をくださいました。（十二月二十五日・於蔵本通支坊）

新世話人



◎新旧交代の世話人

□長ノ木地区

（旧）平田瑠璃子

（新）下野久子（左写真）



□西辰川地区

（旧）菅蒲田美子

（新）田尻妙子

□荒神町草里町地区

（旧）古塚マツエ

（新）濱田清人（左写真）



◎世話人増員（敬称略）

□西辰川地区

広本智百合

□三津田支坊西愛宕地区

楠木アケミ（左写真）



□三津田支坊両城地区

末永哲子（左写真）



※旧世話人の皆さん、長い間本当にありがとうございました。新しいお世話人の皆さん、どうぞ宜しくお願いします。

◎下山田地区・畝原地区・内神地区・町地区のお世話下さる方募集しています。お寺にお力を！

除夜の鐘



今年もたくさんのご参詣・於長ノ木本坊。

修正会



修正会はこの家族でのお参りが増える。古江さんは四世代でご参詣。孫の今本さんご夫妻に前住職の色紙が当たりました。

おたんや
大連夜

安芸門徒は、親鸞さまのご命日法要を「おたんや」と呼んで大切に過ごしてきました。江戸時代に編纂された『芸藩通史』には「封（領地）内、親鸞宗に係わるもの多し。その深く信ずる者は、家に神棚を置かず、病んで祈禱せず、毎年祖師の忌、十二月廿二日より廿八日（旧暦）まで素食（お精進）し、漁獵をせず。」とあります。



左手前が煮こめ。

一九九五年まで、ご命日の一月十六日は、広島一帯、鮮魚店が一斉休業していたのは記憶に新しいところ。間引きをせずに頑張ったのでハワイ・ブラジルなどに移民が多かったことも有名で、最近では『広島学』（岩中祥史著・新潮文庫）にも紹介されています。わが家も十四日から十六日までの三日間、安芸の郷土料理「煮こめ」を食べてお精進で過ごしました。



大連夜は、たまった残口ウを再利用して長ノ木本坊をライトアップ。夜にも関わらずたくさんの方が参詣される。

お寺の子ども会
日曜学校卒業式

写真前列中央が長岡智月さん。

去る三月九日、お寺の子ども会（進徳日曜学校）卒業式が行われ、今年は長岡智月さんが卒業しました。頑張って遠くから通い、よく心のスイッチを学びとり、強くやさしい仏の子になりました。

本願寺会館お茶室

老朽化のため取り壊された

呉仏教婦人会館ですが、この

三月本願寺会館お茶室として

再建完成し、五月十五日にお

入仏式が行われました。中が

気になる方は、毎月二日、呉

空襲の日に行われる二日会（お

茶会とご法話）や、国文学

そして親鸞さまのお手紙講話

（新任職担当）にお参り下さい。

【お問い合わせ】TEL〇八二三

（二）三八五三・本願寺会館。



初参式・入園入学奉告式

去る三月三十日、春休みの最後の日曜日、恒例の初参式しよさんしきと入園入学奉告式が行われました。嬉しいことに、ここ数年中学生もお参りしてくれます。ご法話では、星野



はしのしくお祝いしてくれました。かくの人生、辛いことも大切に味わって過ごせたらと思います。今年もシャンピー

富弘詩「悲しみの意味」を味わいました。私の人生は、辛いことと楽しいことでワンセット。それもあつという間です。せう

【初参式】
今本 葵心
浮島 日葉里

【入園奉告式】
出木 谷奏帆
清水 貴志
元中 唯優

【入学奉告式】
出木 谷香帆
桂木 奈帆
長岡 慈月
柳谷 虎乙郎

【中学入学】
浮島 日奈子
大洲 一星
長岡 智月



第48回初参式・第18回入園・入学奉告式。

合同花まつり at 蔵本通支坊

去る四月十九日（土）、蔵本通支坊で恒例の合同花まつりを行いました。六十八名の参加でしたが、今年は保護者が特に多く、合計約百名がにぎやかにお釈迦さまのご誕生をお祝いしました。



小学生に刃物を見せたとか。テレビで全国放送されました。さらに6月27日にも下校時刃物を持った不審者がた

実は、四日前の十五日（火）、お寺の前で男が小学生に刃物を見せるという事件がありました。保護者が多かったのは、皆さんがきつと心配されたのだと思います。私どもも異例の厳戒態勢げんかいたいせいで臨みました。集合解散時には警察に協力を依頼、出入り口にスタッフが見張り立ち、行事が始まったら門を閉め、不審者が侵入したら笛を鳴らすようにしました。何事もなく無事に終わることができ何よりでしたが、物騒な時代

になったものです。

ご法話の後は、楽しい出店。今年は「バツティングセンター」が新登場。地面に置いた機械からボールがポンと宙に浮き、そこを上手く打って遠くに飛ばすか、籠の中に入ったら高得点。やってみるとなかなか打てません。単純ですが結構向きになるゲームです。



新登場バツティングセンター



花御堂で誕生仏に甘茶をかけて合掌。

じゃ」ということで、注文した食べ物飲み物をひとつ残らずきれいに平らげ、最後に合掌、食後の言葉を言って帰りました。

それからもうひとつ、今年はとても嬉しいことがありました。会終了後、スタッフで打ち上げをしたのですが、お開きになるころ、誰からともなく今日のご法話（長岡正信さん）の話になりました。「今日は、（本当の合掌は行動になる）」という話だったなあ、ワシらも残さずに帰ろうで」「ほうじゃほう

合掌もせず、いただきますも言わず、それが当たり前になってしまった現代日本、本当にこれでよいのでしょうか？また、合掌はしても形だけの私でしたが、「本当の合掌」は「行動になる」ということをお聞かせいただき、残さず食べてい



「合掌しましょう」と長岡正信さん。恥ずかしがってしない子も、はじめてしてくれた子も。本当に尊い瞬間です。

るか、好き嫌いを言っていないか、作ってくれた人に「美味しかったよ」と感謝を伝えているか…、無神経な日常を問い直すご縁をいただきました。

私の経験では、一度思ったくらいではすぐ忘れてしまつてなかなか身につけません。しかし今回お寺で学んだ合掌は、ありがたいことに形だけに終わらず行動となりました。考えてみると、私たちがその気になったのは、今回のご縁だけではなく、両親やご先祖、どれだけ多くの先達の積み重ねのご苦労があったのだろう、そう考えると涙が止まりませんでした。

三津田支坊花まつり

三津田支坊花まつりは、ご門徒主催。四月五日（土）に行われ、今年も子ども約五十名、大人約八十名がお参りされました。今年も写真はないのですが、口コミで地区外からもたくさんお参りされたとのことでした。

誓子の日記

皆さんお久しぶりです。最近体力が落ち、根気が続かなくなりました。長男慧は、高三の最後に念願のインターハイに出場、ベストエイトに入賞。その後火がついたように受験勉強するも、二兎を追う者はなにとやら、あえなく失敗し現在予備校生です。二男学はパソコンゲームにはまっています。三男遊は、相変わらずマイペース、寄り道を趣味としています。下の二人はお勉強もしないし何を考えてるか分かりません。口やかましく注意するのですが、体力がもちません。お寺もあちこちが壊れるし物いりだし、消費税も上がって困っています。どうもこうもこのままです(笑)。